



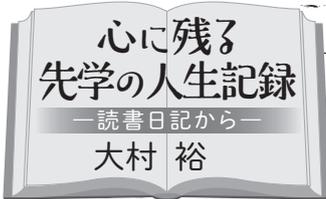
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.249  
2024.6.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第40回

## 宮本常一『民俗学の旅』 (講談社学術文庫 1993年)

民俗学者・宮本常一博士(1907~1981)は、本連載で紹介した渋沢敬三の愛弟子である。考古学分野では、研究史上著名な横浜市所在の「宮の原貝塚」(縄文中期初頭)や「霧ヶ丘遺跡」(縄文早期後半)の発掘等に関わったことで知られている。特に後者では、まだ周知されていなかった縄文式の「陥穴」の研究において、調査担当の今村啓爾氏に民俗学的な事例を教示して背中を押したのが宮本博士であったのである。この本には考古学に関わる話題はほとんど載っていないが、人との接し方、損得を考えず誠実に調査を進める姿勢は、学ぶところが多い。

宮本常一は1907年、山口県大島郡家室西方村で誕生。家は貧しい農家だったというが、もとは裕福な家であって、多くの土地を小作に出し、居宅は「善根宿」といって旅するものは誰でも宿泊させ、しかも宿賃は取らなかったという。諸般の事情から祖父の代には没落していたが、「善根宿」はその後も続けられていたというから、本当に善意に溢れた家で常一は生まれ、育ったのであった。まず常一の祖父という人が素晴らしい。祖母と恋仲になったとき、祖母の親が結婚に強く反対したという。ところがその後、祖母は瘡痍にかかり、顔に「あばた」が出来た。それで祖母の親は弱気になって、「あばたでも嫁にもらってくれるか」と祖父に尋ねると、「あばたになっても好きは好き」と言って結婚したのである。しかも貧しい農家であったので、祖母の親がそれを心配したところ、「女房を野山の働きには一生使いたくない」と答え、それを生涯守っていたというのである。明治時代の農村にあって、これは稀有なことである。極貧の中でも妻を大事にしている祖父は、村の女性たちから大変な好感を持たれたのであった。しかも孫の常一をどこに行っても連れて歩き、夜は抱いて寝ていたというのだから、女性たちから見たら「理想の男性」と映ったのではないか。常一の文章から自然ににじみ出ている「やさしさ」は祖父譲りのものかも知れない。

一方、父はかなり激しい気性を持つ人であった。妻と結婚することを反対した相手方の両親の前で、出刃包丁を畳に突き立てて結婚の許可を迫ったという。彼は極貧のなかで満足に小学校にも通うことが出来なかったというが、相当な頭脳の持主でもあった。仕事で山に上れば、中国山地・四国山地・海に浮かぶ島々の一つ一つについて常一に説明してくれたという。常一が故郷を離れる際に与えた父の訓戒は、まるで人文地理学者のそのように思える。その他諸々の豊富な知識を持っていたというが、それは本から得た知識ではなく、多くの人から聞いた知識を蓄積したものであったろうと常一は想像している。彼は、調査でその土地のことを教えてもらうとき、「私は素人なので、小学生に話すようなつもりで教えてください」と謙虚な態度を示している。また、漁師たちの生きた知識と技術に対しては、こんな感想を述べている。「漁民たちはみなすぐれた学者である。その体験がごまかで知識が確実であること、しかもそれが一人一人によって体系化されている」という

である。生業に関わる深い知識を持ちながら、文字で自らを語らない人々に対する畏敬の念は、父の後姿を見て醸成されたものであろう。

次に宮本常一の履歴を概観する。宮本は、小学校卒業後、一年間父のもとで「百姓」をしている。この体験が、農村を歩くとき貴重なものとなる。農民と仲間意識があるので、話が自ずと弾むのである。農業従事はしかし1年で終わり(1923年)、宮本は叔父の勧めもあって大阪に出て郵便局長となる。1926(大正15)年には、師範学校の二部に入学。卒業後は短期現役兵を経て大阪府の小学校に奉職することになる。これ以降、途中で師範学校専攻科に在籍したり、病気療養のため休職したりしたもの、基本的に1939(昭和14)年まで教員生活が続く。宮本は歩くことと人の話を聞くことが好きで、校務の傍ら学校周辺を歩き回る。河原で生活している「乞食」と仲良くなって彼らの生活について聞きとりをしたり、寺院に祀られている仏像を拝観したり、道で出あった人々と立ち話をして村の生活や土地の権利関係に関わる話を聞きとったりしている。当時は意識していなかったであろうが、立派な美術史および民俗の調査をしていた訳である。こうした活動をする中で、柳田國男や渋沢敬三らと知遇を得ることになるのである。

1939(昭和14)年には渋沢敬三が主宰するアチック・ミュージアムに入所する。本当は教員を退職し、満州建国大学にゆく予定であったが、宮本が「師範学校しか出ていないので満州にいても決して条件がよくない」ということを渋沢が心配し、「アチック」に引き留めたのであった。かくて「アチック」の2階の三畳一間を拠点にして各地の民俗調査に出かけることになるのである。これ以降、宮本の進路の話はほとんど渋沢に報告し、許しを得ることになる。渋沢経由で来た就職の話は渋沢が断ったことが多かったようだ。この処置は悪意から出たものではない。渋沢は、1939年の時点でく日中戦争は泥沼に入り込み、やがて世界大戦になる。そして日本は敗退することになり、日本の社会は大きく変わることになるだろう。その前に昔から残されてきた日本の生活習慣や文化を、アチックを拠点にして存分に宮本に見聞かしておいて欲しい。そして戦後へつなぐ一つのパイプの役割を宮本に果たして欲しいという願いを持っていたのである。戦後は、宮本の健康状態を考慮して彼の進路をさばっていたようだ。無鉄砲な宮本を前にして、「私は君の防波堤だ」と宮本に語っていたという。またそれだけでなく、彼の実績・実力に見合った就職先を考えていたのであろう。渋沢の最晩年(1963年)、武蔵野美術大学からの招聘の話が宮本のもとに入って来たとき、ようやく許しを与えた。そしてその年の10月に渋沢は逝去したのであった。

大学に職を得た宮本は、水を得た魚のように美大生を前にして「生活史」の講義やゼミの指導をする。芸術専攻の筈の教え子たちの中には、宮本に感化されて卒業後も民俗の調査を長年継続する者が続出したという。借り物でない、体験に裏付けられた指導の賜物であろう。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第40回) 大村 裕 …1  
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第15回) 山本暉久 …2

■考古学者の書棚「中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都」 金馬義郎 …3  
■広告 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第15回)

山本 暉久

15. 大学院での考古学 その4

—エジプト・マルカタ遺跡の調査に参加③—

マルカタ遺跡の発掘は、毎週金曜が休養日であった。発掘中の1週間は宿舎でシャワーを使えないため、その日は対岸に渡り、ホテルのバスルームで1週間分のアカを洗い流し、気分がすっきりとなって再び宿舎のカーターハウスに戻る生活であった。

発掘は順調に進み、ナイル河畔の砂漠に接する箇所を設定したグリッドからは、上層にローマ時代の日干レンガで築かれた住居跡が検出され、アンフォラ(amphora)と呼ぶ双把手付のワインなどを貯蔵する壺形土器を始め、多くの土器が出土した。こうした土器類は、破片状態のものは、すべて投棄され、完形ないしそれに近いものだけが採集された。膨大な量の破片を採集しても、その後の扱いに困ることが理由のようであった。また、青銅製のcandle-stick(ろうそく立て)なども出土した。その下層はナイル河の毎年の氾濫によるシルト質の砂礫粘土層が堆積し、この層から先王朝時代と思われる結晶片岩(schist)製の楕円形palette(化粧板)や象牙(ivory)製のhair-pin(髪留め針)などが出土し、当初の調査目的であった先王朝時代の遺構などが存在する可能性がうかがえた。

さらにその下層の砂礫層中に、後期旧石器時代末に相当するフリント(flint)製の細石器が数多く出土した(挿図左)。私にとっては、これが、今回の調査の最大の収穫であった。調査区北方には小高い塚状の高まり(「魚の丘」[Kom-El Samak]と呼ばれる)があったが、ここの裾野に設定したグリッドから、ローマ時代のミイラ棺が発見された。内部の人骨はその保存状態は悪く骨化していたが、この地域に墓地が存在することが明らかとなった。この丘こそが、1974年の第3次調査において調査され、第18王朝第9代ファラオであったアメンヘテブ3世が造営した儀式に用いられた彩色階段を伴う建物跡であった。

ところで余談になるが、このミイラ棺を取りあげて、宿舎に持ち帰ったのだが、さて、これをどこに仮保管すべきかとなったとき、置き場のスペースがないため、とりあえず、隊員のベッドの下に置くということになり、櫻井先生曰く、「じゃあ、テルくんのベッドの下にしよう!」とのご託宣。さすがに、「先生、それは勘弁してください!!」と、かたくなに固辞した結果、結局、隊長の川村先生のベッドの下に収まることとなったのである。「川村先生、本当にすみません…」

調査が進むなか、1月21日~29日にかけて、調査を一旦中断して、エジプト南部のアスワン(Aswan)へ遺跡見学に出向いた。

ルクソールから飛行機でアスワンに向かい、翌日から5日間の予定で船に乗りナイル河クルーズが開始された。その最大の目的は、アスワンハイダムの建設により、水没することとなった結果、ユネスコにより移築されたアブシンベル(Abu Simbel)神殿を訪れることであった。この岩窟神殿は新王国時代第19王朝の王、ラムセス2世により造営されたものである。かくして、24日夕刻から翌日にかけて岩窟神殿を見学した。そのときの感動は日誌に次のように記されている。「夜のアブシンベル神殿を訪れる。ライトに浮き出された神殿の素晴らしさとその大きさ、そして、完璧な移築の姿にただただ驚くばかり。とくに岩窟神殿内部にある有名なカデシュの戦いのレリーフに感銘す。」この移築された神殿は、コンクリート製のドームを築いてその中で移築されたもので、神殿内部とは別にそのドーム内部も見学することができ、その移築技術の精密さにも驚嘆した。このほか、アスワンハイダムによりなつか水没したフィラエ神殿(後に移築)など、アスワンハイダム周辺の遺跡を見学し、29日アスワンから飛行機でルクソールへ戻った。

1月30日発掘が再開された。相変わらず砂礫層中から細石器が出土した。石核がないことから、製作址ではないようで、二次堆積した可能性も考えられた。なお、調査期間中は、王家の谷にあるツタンカーメン王墓を初めとする岩窟王墓群の見学やハトシェプスト女王の葬祭殿など、ルクソール地区の著名な古代エジプトの遺跡も見学することができた。2月19日には、マルカタ遺跡北西にある段丘へ、ジープで砂漠を横切って表面採集調査に出かけた。遠目には、段丘がところどころ黒く見えていたのだが、実際、その段丘面に行くと、表面に無数の旧石器が露出していることがわかった。ルヴァロワ石核を含む中期旧石器(挿図右)であり、今もなお地表に無数の中期旧石器が露出して残っていることに驚きを隠せなかった。

かくして、2月24日、遺跡と別れを告げ、28日まで遺物の登録や残務整理、荷物の梱包などに当て、29日カイロに戻ることとなった。エジプト考古学を専門とするわけではなかったが、貴重な海外調査を経験することができたことは自分の考古学人生のなかで大きな財産となったことはいうまでもない。3月13日~23日、吉村さんを除く隊員は、カイロ空港を出発し、イタリア(ローマ・ナポリ・バチカン)、イギリス(ロンドン)、フランス(パリ)を訪れ、各地の博物館や名所・旧跡を見学することができた。

カイロに戻ったあとは、内藤くんととも船便の梱包など残務整理やアレクサンドリアに向いて船便の状況などを確認して、4月4日、内藤くんより先に、一人帰国の途についた。25歳の春であった。

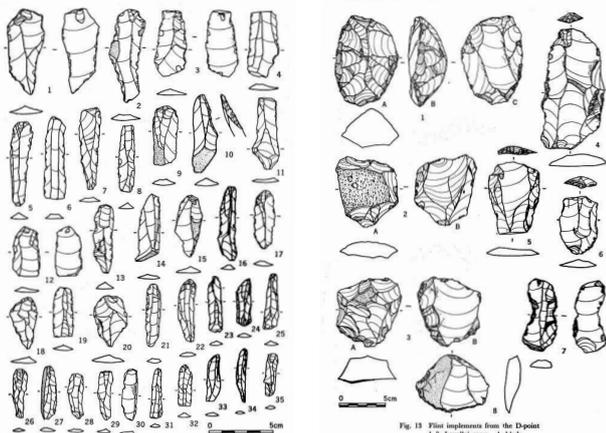


Fig. 19 Stone implements from the grave of the S-7 (I)

Fig. 19 Stone implements from the grave of the S-7 (I)

Fig. 19 Stone implements from the grave of the S-7 (I)

Fig. 19 Stone implements from the grave of the S-7 (I)

Fig. 19 Stone implements from the grave of the S-7 (I)

Fig. 19 Stone implements from the grave of the S-7 (I)

略歴	
1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英式記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

## 考古学者の書棚

## 「中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都」

河野真知郎 著／講談社学術文庫(1995)

金馬 義郎

はじめに - 「ふくろの中に物をいれたるやうにすまいたる」 -

「ふくろの中に物をいれたるやうにすまいたる」とは、本書で引用された『問はず語り』の一節である。正応二年(1289)、京都から鎌倉を訪れた後深草院二が鎌倉時代の鎌倉の様相を、「袋に物を詰め込んだようにごちゃごちゃとしている様(意識)」と表現したものであるが、まさしくこの一節の通り、現在観光地としても有名な鎌倉の市街の大半は、大量の遺物や遺構を包蔵した遺跡である。特に海水浴場として広く親しまれている由比ガ浜や材木座海岸は現在でも中世遺物の表面採取が可能で、自身も学生時代に拾った陶片を本書の著者、河野真知郎先生にご確認いただき、「これは鎌倉時代の常滑!」とご教授を賜った。それが自身の考古学の出発点でもあった。

遺物だけでも国産陶器たる常滑焼や瀬戸焼、大陸との貿易品である青磁や白磁、在地生産された「かわらけ」などの多種多様な土器・陶磁器類のほか、刀剣等の金属製品、硯や供養塔などの石製品、漆器碗皿、箆や下駄、建築材などの木製品、草鞋や烏帽子、扇などの有機物資料、人骨を筆頭とする動物遺存体等々…様々な資料が大量に出土し、発掘調査で得られる「物を通した情報量」は極めて莫大なものである。

本書では、それらの出土資料から得られる情報に対し「どう整理し、どう捉えるか」という部分で、古典での記載や絵画資料などからの考察も含む多角的な検討を試みている。自身の拙文で大変恐縮だが、中世都市鎌倉に限らず、歴史学研究全般にわたる本書の重要性をここに紹介したい。

## 本書の構成と特徴

本書ではこの混沌とした鎌倉という都市遺跡を「第一章 鎌倉を歩く」「第二章 武家屋敷を訪ねて」「第三章 お寺に行こう」「第四章 お墓はどこに」「第五章 鎌倉の「食」」「第六章 「消費」する都市」と六章に分けて説明している。各章にわたって考古学から人々の生活や様相をどのくらいのビジュアルに復原できるかを試行しており、圧倒的な「物を通した情報量」から中世鎌倉を疑似体験するような内容となっている。はじめに、「鎌倉学」と題し、鎌倉の考古学にかかわる研究史を概観し、「第一章 鎌倉を歩く」では、鎌倉という都市成り立ち、地形的な説明から道路や都市的景観をまとめている。大路の側溝の造成に幕府が御家人に課役していたことを示す木簡を紹介し、都市の維持や開発の実態にも触れている。「第二章 武家屋敷を訪ねて」「第三章 お寺に行こう」「第四章 お墓はどこに」では、武家屋敷や寺社の鎌倉における役割やその遺跡的な特徴に触れつつ、そこに生活した人々の在りようを考察し、職能民と武家屋敷の関係や宗教観に至るまで、出土資料を基にその復原を試みている。「第五章 鎌倉の「食」」「第六章 「消費」する都市」では、多様な文物を呑み込む消費地として中世都市鎌倉を捉え、町屋、特に「竪穴建物」と称される遺構が密集した浜地の倉庫的な機能を提唱、それに絡む搬入品の流通や管理、貨幣経済などを説明し、貿易陶磁などの出土傾向から社会的

な階層を超えた搬入品の大量消費の実態を「鎌倉的消費文化」と位置づけ、その特異性を訴えている。

このように、鎌倉という都市の実像に考古学的に迫りつつ、「どんな顔の人間が、何を食し、また何をして遊んでいたのか」など同じ人間として興味を惹かれる部分について、具体的な出土資料を以て説明しているところが本書の最大の特徴である。本書で復原されたビジュアルは、鎌倉を闊歩した武士や職能民、白拍子などの人物像にさえ手が届きそうなりアリズムを感じさせられる。特に双六や将棋の駒、碁石などの盤上遊戯の痕跡や、丁半賭博を想像させる偶数目(丁)しかないサイコロ、ニセ金の出土など、莫大な資料の中から人々の暮らしに視点を置いた内容は、専門的に鎌倉を掘ったことがない読者(分厚い土丹地業層を円匙やツルハシで掘り剥がした経験がない者)にもわかりやすく中世都市鎌倉の様相を感じることができる。また、絵画資料や古典からの検討は考古学的に説明しづらい部分を補完し得るものであることを本書は強く示唆している。

## おわりに - 「鎌倉ブラックホール論」に呑まれて -

本書ではむすびにかえて、鎌倉の特異な消費文化「鎌倉的消費文化」が鎌倉周辺への拡大を示さず、一方的なものであるとして「鎌倉ブラックホール論」を提唱している。出土資料の量だけでなく、東国の中心たる鎌倉において畿内風の「かわらけ」の出土や「西」を意識(本書では「あこがれ」と示されている)した文化、貿易陶磁など当時としても希少価値の高かったであろう海外からの物品が当然の如く出土し、輸入ブランド好みの様相さえ伺われる多様な文物を吸い上げながら、東国の周辺の地域に波及することもなく、一方的に消費される様を「ブラックホール」と表現している。文物や人的資源が都市鎌倉に一極集中し、貨幣経済が浸透することでその自己増殖が加速した結果と説明され、本書の内容を総合的にまとめる結論となっている。

日々蓄積する発掘調査成果は未だにその「ブラックホール」の底を見ない。学生時代、由比ガ浜で常滑焼の破片を拾い、鎌倉の発掘調査に参加する機会を得てからというもの、他の自治体にいながら、自身もその莫大な情報が渦巻く混沌を探り続けている。

本書はその混沌の中で一筋の方向を示すものであり、日々行われる発掘調査で新しい発見が積み重なる中、都市遺跡という特殊な事例に限らず、個々の事例の検討に対する多角性の重要さを、本書はいつも傍らからご教授してくださっている。もし自身の拙文をお読みいただき、本書に少しでも興味を持っていただければ、またお手に取っていただけるのならこれ以上の幸いはない。

## アルカ通信 No.249

発行日 2024年6月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp

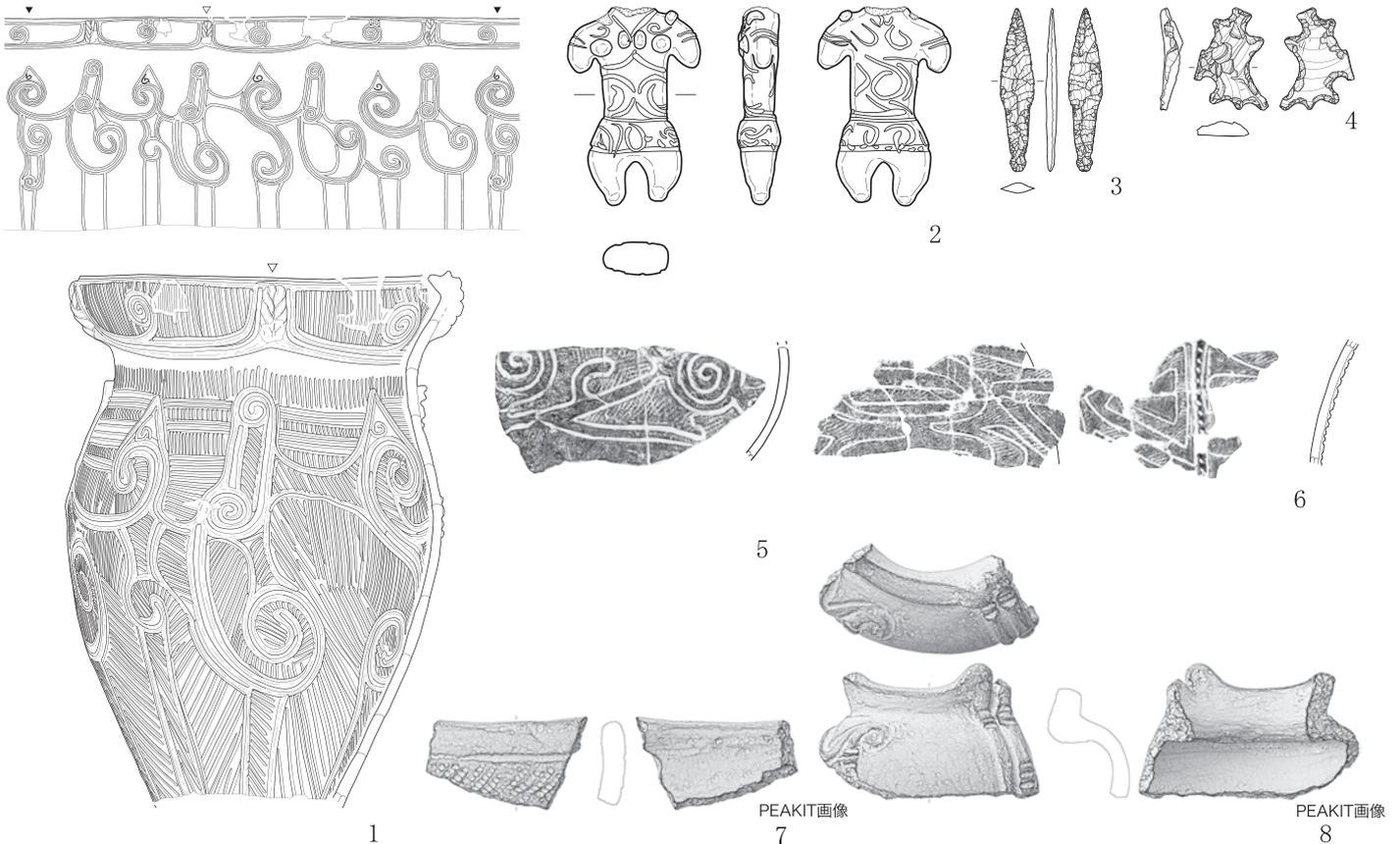
整理・図化でお困りのときは

# 株式会社アルカ

へご連絡ください

埋蔵文化財整理業務の株式会社アルカです

土器・土製品・石器・石製品など、あらゆる埋蔵文化財の整理・図化等を行っております。



(縮尺不同)

〔出典〕

- 1, 5, 6 長野県木曾郡大桑村 下条Ⅰ遺跡 2016 大桑村教育委員会
- 2~4 五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第34集 五月女菴遺跡 2017 五所川原市教育委員会
- 7, 8 表採 個人所蔵

土器・土製品・石器・石製品・陶磁器等の図化、拓本、トレース、各種写真等も承ります。3Dレーザースキャン、SfMなど非接触の計測による、遺物の3Dデータ作成、実測用下図作成、土器の展開画像作成なども承ります。

図化例はホームページにてご覧いただけます。「1点だけ分析したいものがあるけど、図化と一緒に発注したい。」等、どんなことでもご相談ください。

アルカ研究論集第6号ができあがりました。ご希望がございましたら弊社までご連絡ください。



株式会社

考古学研究所

## アルカ

〒384-0801 長野県小諸市甲49-15

代表：角張 憲子 担当：近藤・宇賀神

http://www.aruka.co.jp Mail: aruka@aruka.co.jp

TEL: 0267-25-0299 FAX: 0267-26-2371